
曖昧問答

ただ書く人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曖昧問答

【Nコード】

N8286Y

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

気づいてくれればいい。

男子学生と女子学生の曖昧な気持ちと曖昧な言葉。

会話文のみで書いてみました

「たんたんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

「ねえ、地球が丸いって知っているかしら」

「もちろん知っているけど……」

「どうして」

「それが普通だと思うけど……。学校でそう習ったし、宇宙から撮った写真を見たこともあるし……」

「それなら自分で気づいたわけじゃないのね」

「ああ、うん」

「海に行ったことはあるかしら」

「もちろん」

「砂浜とか岬の崖の上とかどこでもいいけど、そこから水平線を見た時に地球は丸いなあって思ったかしら」

「うん、思ったよ」

「でも先に地球が丸いことは知っていたんでしょ。知らなかったらどうかしら。もしかして地球は丸いのかなくて気づくかしら」

「どうだろう。おれは何も気づかないんじゃないかな」

「わたしもそう思う。川上くんは気づかないだろうし、わたしも気づかないと思う。じゃあ、わたしのことはどう思つかしら」

「え。わたしのことってどういうこと」

「わたしの顔はどうかしら」

「丸いかったことかな。まんまるではないけど丸顔な方だと思うよ」

「そうね……。わたしもそう思う。川上くんはどうしてわたしが丸顔って気づいたのかしら」

「そりゃ、いつも見ているし……」

「いつもわたしを見ているの」

「そういうことではなくて、大学に来ればいつも顔を合わせるだろう」

「ええ。……それなら顔を見れば丸顔かどうかわかってことね。」

「じゃあ、鏡がなかったらわたしはわたしの顔が丸顔だって一生気づかないのかしら」

「さあ。どうだろう。池だとか水たまりだとかで気づくかもよ。もしかしたら誰かが教えてくれるかもしれない」

「そうね。教えてくれればわかるのよね……」

「丸顔が嫌なのかい」

「いええ、自分の顔は好きよ。川上くんは好きかしら」

「矢島さんの顔のことかい。それとも自分の顔のこと」

「どっちでもいい」

「え、まあ、嫌いじゃないけど……」

「わたしのことかしら」

「いや、うん」

「どっちなの」

「……両方嫌いじゃないよ」

「嫌いじゃないって曖昧よね……。曖昧といえば、さっきの水平線なんだけど、水平線を見て空って何だろうって思ったことはあるかしら」

「ああ、なんとなくそう思ったことはあるなあ」

「空って何だと思うの」

「空気、いや、大気かな。違うかい」

「そうだと思う。大気圏っていうじゃない。わたしは空って宇宙だと思うんだけど、空は大気圏で、大気圏の向こうを宇宙っていうらしいわよ」

「でも目に見える境界があるわけじゃないし、宇宙でもいいんじゃないかな。詳しいことはおれもわからないな」

「境界は見えないけど空は見えるじゃない。それなのにわからないこともあるのね」

「そうだね。見えてもわからないことはたくさんあると思うよ」

「じゃあ、川上くんは女の子と喫茶店に来たことはあるかしら」

「ああ、今まではなかったな。今日が始めてだ」

「わたしも今日が始めて。喫茶店にふたりでいるわたしたちって恋人同士に見えるのかな」

「え。どうか。そう見える人もいるかもしれないけど、わからないな」

「そう……。それなら、わたしたちが見えているのにわたしたちの関係がわからない人がいるってことね。ユキと田代くんはどうかしら。あのふたりが喫茶店にいたら恋人に見えると思う」

「それも同じじゃないかな。そう思う人も思わない人もいると思うよ」

「わたしたちもユキたちも同じってことね。でも、わたしたちはユキたちがお互いの恋人だってわかるわ」

「そりゃ、ふたりを知っているからね」

「それはどうして知っているのかしら。学校で習わないし目で見てわからないじゃない」

「おれは確か田代に聞いたんだけど……。まあ、そうでなくてもなんとなくわかったけどね」

「どうしてかしら。ユキと田代くんが喫茶店にいても恋人に見えるかどうかわからないんでしょう。それなのにどうして川上くんはなんとなくわかったのかしら」

「なんとなくだよ……。ともだちだから、じゃないのかな。近くにいれば気づくというか……」

「近くにいれば他の人が気づかないことも気づくことがあるのね」
「そうだと思うよ」

「わたしたちもともだちでしょう。いつも顔を合わせるってさつき川上くんも言ってたし、近くにいろわよね」

「ああ、うん。そうだね」

「それなのにわたしは川上くんが四限の授業があるかどうかとも知らないわ」

「そりゃ、知らないこともあるだろう。四限はないよ」

「わたしも四限はないわ。でも三限も四限もないのならどうして学

食にいたの」

「いつもそうしているよ。外より学食の方が安いから。矢島さんこそ水曜はいつも二限が終わったら帰っているのに、今日はどうして学食に来たんだい」

「なんとなく」

「曖昧だね」

「うん。いつもは帰ってご飯を食べるんだけどね、今日はなんとなくの。お昼もいっしょで、こんなところにまで誘って、迷惑だったかしら」

「まさか。むしろうれしいよ。バイトもないし、帰ってもやることはないからね」

「よかった。それならついでに夕食まで誘ってもいいかしら」

「いいね。田代たちも呼ぶかい」

「え……。うん。どっちでもいい、かな」

「よし。メールを送っておこう」

「あ、やっぱり、さっき二限のあと、ユキと田代くんいっしょだったし、邪魔したら悪いかも」

「そうかい。うん、そうだね。他に誰かいるかな」

「無理に誰かを誘うこともないんじゃないかしら」

「まあ、そうだけどね……。どこに行こうか。ファミレスでいいかな。居酒屋でも行くかい」

「わたしはちよつと飲みたいかな」

「じゃあ、そうしよう」

「川上くんは結構お酒強いよね」

「そんなことないと思うよ。酔わないだけで、みんなで飲んだ時も家に帰ってから気持ち悪くなったりするしね」

「酔わないのがうらやましいわよ。わたしなんてすぐに酔っちゃうもの」

「女の子はそれくらいの方がいいだろう」

「男の人って自分のお酒に付き合ってくれる女の子の方がいいんじ

やないの」

「人それぞれじゃないかな。おれは別に酒好きってわけじゃないしな」

「それならいいけど……。あ、お父さんもお酒に強いのかしら」

「うちの親父かい。親父は毎晩飲むタイプだし強いんじゃないかな。いっしょに飲んだことがほとんどないから、わからないけどね」

「そう。家族でもわからないことがあるのね。お母さんはどうなの」

「母親は飲めないわけじゃないけど弱いよ。コップ一杯のビールで酔っ払うって前に言ってたし」

「じゃあ、わたしと同じかしら」

「矢島さんより弱いと思うよ」

「そう。でも良かった」

「何が良かったの」

「何でもない。ねえ、お母さんのことは好きかしら」

「え。母親かい。どうだろう。嫌いではないけど……」

「また曖昧ね。嫌いではないけど好きでもないのかしら」

「好きっていうと、何か違う気がするんだよなあ。好きは好きだと思っけど……。あ、マザコンだとかそういうものではないよ」

「わかるわよ」

「好きって言葉でなくて、もっと別の言葉がありそうだけど……。ほら、家族ってそうじゃないかな」

「そうね。言いたいことはわかる。それなら、田代くんはユキのこを好きかしら」

「そりゃ、好きなんじゃないのかな。付き合っているんだし」

「じゃあ、ユキと田代くんがずっとこのままで、結婚したらどうかしら」

「それでも好きだと思うよ。結婚は好きだからするものじゃないのかい」

「でも、結婚すると家族になるでしょう。そうすると、川上くんがお母さんに思っているような気持ちになっちゃって、好きではなく

なるんじゃないかしら」

「そうかな。いや、違うんじゃないかな。やっぱり好きは好きだと思っけど……」

「どうして違うの。どうして家族でも好きなの。川上くんは好きって言葉ではないんでしょう」

「おれも結婚していないからわからないけど、親子と夫婦は違うと思うよ」

「じゃあ、夫婦なら好きって言葉でもいいのね」

「おそらくはね」

「ちよつと曖昧ね。わたしもそう思っけど」

「それなら聞かないでくれよ」

「確認をしたかったの」

「何の確認だい」

「大したことじゃないの。ほら、近くにいても、ともだちでも、考えていることはわからないでしょう」

「だから今日はいろいろと聞くのかい」

「そういうわけじゃないけど……。川上くんだってわたしの頭の中なんてわからないよね」

「うん、まったくわからないね」

「まったくわからないの。少しくらいはわかるんじゃないのかしら」

「え。わからないよねって言うておいてそれかい。そうだな。少しくらいならわかりそうだな」

「それなら今わたしが何を考えているかわかるかしら」

「今かい。どこの居酒屋に行くか、何時頃に行くか、もう一杯コーヒーを飲むか、といったところかな」

「それは川上くんが考えていることでしょう」

「よくわかったね」

「今のはともだちじゃなくてもわかりそうよ。そうね。ヒントはこれまでの会話ね」

「地球だの宇宙だのも含めてかい」

「ええ、全部」

「本当は少しわかりそうだったんだけど、今のヒントで急にわからなくなったよ」

「じゃあ、最初に思ったことは何かしら」

「……いや、ちよつと言いつらいな」

「川上くんは勇気があるかしら」

「どうだろう。時と場合によるから何とも言えないな」

「曖昧ね。言いたいことがあるのに言いつらい。聞きたいことがあるのに聞きづらい。やりたいことがあるのにやりづらい。そういつた時にはどう。勇気を持って行動できるかしら」

「ああ、それなら勇気がないかもしれないな」

「即答ね。思い当たることがあるのかしら」

「ちよつとね」

「わたしもそうよ。……でも今日は少し勇気が出せたと思うわ」

「そう……。それなら良かった」

「わたしも曖昧だけど川上くんも曖昧よね。わたしは曖昧ってやさしいってことだと思うの。それは他人にやさしい時もあるけど、主に自分にやさしいものよ。失敗をしないように安全なところにいるためのもの。悪いことだとは思わないわ。その方がうまくいくことだっただいでしょう。勇気がないことの言い訳かもしれないけど……」

……

「そうだね。勇気がなくて曖昧でも伝わることもあるだろうし。今日の矢島さんは曖昧というか、迷走しているようだったけどね」

「でももう気づいたんでしょう」

「ああ……。おそらくは」

「曖昧じゃない方がいいかしら。どうした方がいいと思う」

「無理に言ってくれなくてもいいよ」

「……そういうことは言わないでくれってことかしら」

「そうじゃないよ。矢島さんがおれの考えている通りのことを思っているのなら、おれも同じことを思っているから」

「曖昧ね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286y/>

曖昧問答

2011年11月24日19時01分発行